

# 東アジア全体を踏まえた訓読研究

藤本 幸夫

近年訓読に関心が高まりつつあり、その方面の書籍の刊行が続いている。つい最近までは訓読は日本特有のもので、奈良時代末に東大寺の華嚴宗関係の僧侶の考案にかかるのであろうなどと、考えられていた。中国の文化的影響を古くから受け、またそれを今日まで継承する中国周辺の国家としては、まず朝鮮と日本が脳裏に浮かぶ。古代朝鮮には高句麗・百濟・新羅があり、これらの言語の詳細は未だはつきりしないが、これら三カ国の言語が日本語とはほぼ同様の文法構造を有し、また現在朝鮮半島で使用される言語は新羅語の系統を引くものであろうことは、確かと思われる。日本は古代朝鮮から文化的影響を深く受け、また仏教も百濟から伝えられている。そして古代にお

いて朝廷などで文筆の業に携わったのは、中国や朝鮮よりの渡来人であった。従って日本訓読の濫觴を朝鮮に求めるのは極めて自然であり、またそのように考える学者もいた。しかしつい最近まで確認し得た朝鮮の漢文資料読法は、日本の訓読法とは全く別種のものであった。即ち朝鮮では漢文は返読せず、朝鮮漢字音で読み下して行き、格助詞や句点・読点の入るべき場所に送り仮名（これを「吐」と称す）を挿入する。その送り仮名とは格助詞一つからかなり複雑な文法形式に及ぶ。表記には漢字の音・訓を用いるが、刊本には全画字、筆写本には省画字（利<sub>レ</sub>リ、尼<sub>ニ</sub>、ト）を用いることが多い。ところが一九七三年に刊本旧訳『仁王経』残葉五葉が高麗時代の仏像の胎内から発

金文京著  
漢文と東アジア——訓読の文化圏



新書判 256頁  
岩波書店 [840円]

見され、そこに訓読記号が墨書されていた。納入記等から十三世紀の記入とされる。この資料では省画字の吐が本文の左・右に付され、更に返読記号として単点が付されるが、この三条件によって訓読がなされていた。またその他に漢数字の返読記号も発見された。これらによって朝鮮における訓読の存在は、疑い得ないものとなった。その後、更に驚くべき発見がなされた。それは二〇〇〇年七月、角筆文献研究の第一人者である小林芳規博士のご提唱による韓国資料の調査である。小林博士と韓国側学者との共同調査で、十一世紀高麗の初雕大藏経に角筆による、日本のオコト点同様の書き入れの



あることが発見された。直ちに解説が始められたが、日本の訓読研究には既に百年の歴史があり、小林博士からの韓国側へのご教示がその解説に大いに資したと聞く。解説はその複雑さの故に、まだ完全にはなされていないが、大凡は読み解かれていると言い得よう。その結果、日本のオコト点の点図と高麗のそれとの間に類似が認められ、また十一世紀高麗の複雑な点図が一気に成立したとは考えがたく、それ以前、例えば新羅時代に遡る可能性も考えるのである。そうした場合、訓読やオコト点が従来のように日本独自のものと考えてよいのかという問題が浮上する。金文京氏の近著『漢文と東

アジア——訓読の文化圏』は、以上のような現状を踏まえた上で著されている。金氏は本書を書くに至った動機を「あとがき」で述べておられるが、一九七八年に韓国の海印寺で二人の僧侶が、お経の漢文にアラビア数字を付けて訓読しているのを見て、漢文訓読に興味を持たれたという。その後旧訳『仁王経』から訓読記号が発見されたので、訓読は朝鮮半島で古くから行われており、それが日本に伝わったとも考えたが、一方では漢字・漢文に接した中国周辺地域では、どこでも同じことが起こりうるものであり、契丹やウイグルでも同じ現象のあることを知り、一九八八年には「東アジアの訓読現

象」なる論文を書かれた。本書はその後の韓国における新しい発見を踏まえ、さらに構想を深めて発展させられたものと言えよう。以下に金氏の所説を紹介しよう。

本書は、「はじめに」、第一章「漢文を読む——日本の訓読」、第二章「東アジアの訓読——その歴史と方法」、第三章「漢文を書く——東アジアの多様な漢文世界」、「あとがき」「図版出典・所蔵先」「索引」が続く。金氏は「はじめに」で意図する所を述べておられる。漢字は一字よりも複数が用いることが多く、この漢字の組み合わせによる語彙、文章の作り方に多

菅野智明著

## 近代碑学の書論史的研究

碑学の理論、とりわけ近代北碑をめぐる理論の史的展開に着目。阮元説以降の主要北碑について、書論単位に検討を加え、各説の流れを跡付け、さらに種々の北碑論の主要な争点・議論の経緯を考究。

15750円

目次より  
第一部 主要北碑論にみる阮元・包世臣説の展開  
第一章 阮元・包世臣の北碑論  
第二章 包世臣の北碑論  
第三章 阮元の北碑論  
第四章 包世臣の北碑論  
第五章 阮元・包世臣の北碑論  
第六章 阮元・包世臣の北碑論  
第七章 阮元・包世臣の北碑論  
第八章 阮元・包世臣の北碑論  
第九章 阮元・包世臣の北碑論  
第十章 阮元・包世臣の北碑論  
終章 参考文献 初出 あとがき 索引

## 書学叢考

杉村邦彦著

中国の文化史・書法史の豊かな字種と鋭い洞察を背景とし、王羲之以来中日古今の書人の人間像、芸術活動、交友関係などを文獻資料や書画作品を通して多面的に活写した珠玉の名篇。書学書法史の権威による論文集。

9450円

## 呉昌碩研究

松村茂樹著

詩書画印四絶をもつて中国最後の文人と称せられる呉昌碩の本質に迫る初の本格的な研究。文人と職業書画家という矛盾の中に生きた苦悩と葛藤。また王一亭や丁巳下鳴鶴、河合孝蔵ら日本人との交流など多角的に探求。

7350円

研文出版

東京・神田神保町2-7 ☎3261-9337  
http://www.kenbunshuppan.com/



様性があり、そこにはそれぞれの国、地域の歴史、文化、社会的要素が複雑に影響しているとし、漢字を巡る問題をトータルに理解するためには、東アジア漢字文化圏全体の中で探る必要があるとされる。第一章では、日本では漢字を日本語で読むこと、更には日本語の語順で読むことを「訓」というが、それは中国の用法に由来することを述べる。漢代の訓詁学では「訓」は難しい言葉を判り易く説明することであり、「詁」は古語を今の言葉で解釈することという。日本ではそれを借用したものであるが、日本の場合は日本語で説明する、つまり「和訓」である。金氏は日本の訓読は、中国における梵語仏典翻訳の影響を受けているのではないかとされる。日本で漢文を読むのと、中国で梵語仏典を読むのは、共に言語構造を異にする文章を読むという点で共通している。既に唐代に中国語の場合「飲酒」「読経」というのを、梵語のような西域の言語では「酒飲」「経読」のように語順が逆であると、認識してい

る。中国でも「仏者梵語、晋訓覺也」のように、「仏」(buddhaの音訳)は梵語で、晋(中国)の訓は「覺」と言っている。また仏典の註で「梵云優婆塞、此云清信男」とあるのは、梵語で「優婆塞」というのは、「中国では清信男」という意味で、『日本書紀』などに見られる註と同じ形式であり、『日本書紀』などでの「此」は「日本では」の意味となる。

正倉院に光明皇后(七〇一―七六〇)御筆の『杜家立成雑書要略』なる写本がある。これは唐代初期の書簡模範文例集で、すでに本国では失われ日本のみに伝わるものである。その最初の書簡の題が「雪寒喚知故飲書」(雪の降る寒い日に知合いを喚んで酒を飲むための手紙)で、これを写した奈良時代の本簡が出土している。本簡では「雪寒呼知故酒飲書」となっており、手紙で「喚ぶ」が、本簡では声をかけて「呼ぶ」になっている。これは両字をいづれも「よぶ」と訓読していた可能性がある。また中国では「飲」だけで「飲酒」を意味するが、本簡では「酒

飲」と二字にし、また語順も日本語の語順に従っている。

ところで日本の訓読には種々の記号が用いられる。既に奈良時代末に漢数字で読み順を示し、また顛倒符に「レ」を用いている。これらに中国或いは朝鮮起源と見られるものがある。中国の翻訳仏典中の陀羅尼の切れ目に、漢数字が付されているものがあり、逆順を示してはいないが翻訳時の順序を表すものではないかと、金氏は推量される。中国文は中国人にとっても難解な場合があり、時代が隔たれば難解度は更に増す。そこで文章の切れ目を示す句読点を、「・」「。」「、」や横線などで示した。また文字の上下を書き間違えたのをただす場合には、「乙」の如き記号、或いはこれに由来する「レ」を両字の間右傍に付した。この顛倒符は中国では敦煌文書以降、古代朝鮮や奈良時代の本簡にも見られる。

平安初期の仏典本文右傍に漢字による送り仮名を振ったものがあり、その省略体が片仮名となる。しかし行間に多くの



送り仮名を書くには限界があり、かつ煩わしいのでオコト点が考案されるに至る。オコト点とは漢字を四角形に見立て、その四辺上や内部に点やその他の符号を付して送り仮名の代わりをするものである。オコト点には仏書と儒書では違いがあり、またそれぞれに流派間でも違いを見せる。中国語には平・上・去・入の四声があり、それを漢字を四角形に見立てた四隅に「・」や「。」で示すことが、唐代には見えるので、これがオコト点の成立に影響を与えた可能性が考えられる。

上記の如く韓国から十一世紀の角筆によるオコト点が発見されてから、訓読を日本独自の考案とする見解に再検討が迫られることとなった。というのは、解説が進むにつれ『華嚴經』と『瑜伽師地論』の二系統のオコト点が確認され、日本に伝わる『華嚴文義要決』(八〇〇年写)に付されたオコト点は他に使われることのない特異なものであるが、これが『華嚴經』のオコト点と極めて類似すること、小林博士によって指摘されたからで

ある。資料の年代は日本のほうが古いが、韓国のオコト点は単点・双点・横線・縦線・斜線・複線等々、日本より遥かに複雑で、その発祥はかなり以前に遡りうる。このように考えると、韓国のオコト点の日本への影響がかなりの蓋然性をもつことになる。その他に契丹やウイグルにも訓読のあつたことや、東アジアの漢字を巡る事象を的確な例を挙げて、興味深く述べられる。

金氏の述べられるが如く、訓読が仏典翻訳の影響を受けていることは、疑いの無いところであろう。近年平壤から出土した竹簡『論語』(紀元前四五年前)残簡は楽浪のものであるが、古くから朝鮮に中国書が流入していたことを物語る。

『周書』(六二八年命撰)によれば、楽浪一带に建国した高句麗では五経・三史・『三国志』『晋陽秋』が読まれていたという。高句麗への仏教の伝来は三七二年とされるが、それ以前、つまり仏典の朝鮮流入以前に、極めて限られた範囲の人々によってではあるが、中国書が読まれて

いたに相違なく、その際には訓や訓読が使用されていたと筆者は考えたい。また昨年に入って小林博士は京都醍醐寺所蔵宋版『大藏經』の本文左・右傍に、宋人による種々の角筆記入のあることを確認され、それが文法機能を示すものであると提唱された。それが更に唐代に遡りうるならば、日本・朝鮮のオコト点成立への影響が考えられるであろう。

金氏は筆者四十年來の辱知である。同氏の専門の中心は元代中国語であるが、中国学全般に造詣が深く、日本中国学界を代表する学者である。さらに韓国の訓読関係の学会にも参加するなど、活躍の場は広く且つ視野は大きい。本書は訓読を考える際の信頼するに足るよき指針である。筆者は本書を契機に東アジア全体を踏まえた訓読研究と再検討が深まらんことを希いつつ、本書を広く江湖に薦めたい。(ふじもと・ゆきお 麗澤大学)

